

注目の田中新内閣が成立した。新内閣が総選挙までの暫定政権であるのか、当面する日中国交正常化交渉に備えての布陣であるのか、あるいはこの双方の性格を兼ねるのかもしれないが、これらの点を即断するにはまだ時日を要しよう。なぜなら、新内閣の成立経緯を見てみると問題の多かった総裁選挙の余じんをそのまま吸収した内閣のようにも思えるし、また一方では大平氏の外相就任、三木氏の無任所國務相担当にみられるように、田中—大平—三木のコンビ

●外交時評

田中新内閣と日中交渉

中嶋嶺雄(東京外語大学助教授)



ネーションによる日中交渉への布陣だとも思えるからである。

いずれにせよ、新内閣は、国際化時代といわれる七〇年代の流動する国際関係のなかで、諸外国の対日評価がますます錯さうしたものになり、しかもきびしいものになりつつあるとき、わが国の対外姿勢を誤ることなく方向づけてゆかねばならないという、これまでにない重責をになってここに登場したのである。

新内閣の登場に際し、中国の周恩来総理は去

る七月九日、「田中内閣が日中正常化を促進すると述べたことを歓迎する」と発言した。また同日の新華社電は、新内閣の発足について詳報し、主要閣僚の「対中姿勢語録」を紹介した。これらの事実が中国側のシグナルであることは疑いない。

しかも、今日の中国はますます明白な脱文革化傾向を示しており、周首相のリーダーシップがきわめて目立っているだけに、中国側のシグナルは本物と見てよいであろう。田中首相のこ

とばを借りれば、いよいよ「機は熟している」といえそうである。

こうした状況を十分には握して、日中交渉への準備にとりかからねばならないが、だからといって、新首相がすぐに北京へ飛べばいいというものでないことも明らかであろう。なぜならば、わが国にとっての日中関係は、たとえば米中関係とは異なって、「バスに乗ったり降りたり」することのできない、いわば宿命的に、「両者が「バスに乗り合わせている」固有の関係であり、日中間の長期的な安定こそ、わが国にと

って最大の課題だからである。それだけに、それにはぜひとも周到な準備が必要である。そしてこうした文脈からすれば、日中両国が無理の多い国家関係を結ぶことは、それだけリスクも大きいのであり、長期的な展望に立った日中関係のあり方を、単に時間の問題としてではなく質の問題として、いまこそ真剣に考えねばならないといえよう。そのためには、真に主体的かつ冷静な対応が望まれるのであり、拙速は避けなければならぬ。

第二には、日中関係を広い国際的視野でとらえる感覚である。日米関係、日ソ関係、日中関係という大きな外交軸全体の位置を十分に見きわめ、とくにアジアの全体像を把握して、そのなかに日中関係を位置づけ、外交の進路を多角的に方向づけてゆかねばならない。日中関係だけにのめり込んでしまうのは賢明ではない。

こうした基本姿勢についての一定の合意さえ確立されれば、中国側の日中国交にかんする三原則をまともに受けとめて日中交渉に臨むことに、なんらちゅうちょすべきではない。双方の真剣な話し合いのなかで、日本側も自己の立場を正々堂々と主張すればよい。したがって日華平和条約をめぐる「出口・入り口」論はこれの際、もう一つ次元の高いところへ昇華させるべきであり、そうしてこそ、日中交渉が真に実りあるものになるといえよう。